

江戸時代に制作された畑治良右衛門雛型群についての研究

代表研究者 丹村 祥子

龍谷大学 世界仏教文化研究センター 客員研究員

研究要旨

「雛型」とは、大きな彫像を制作する前に、木材の必要量を計算し、木寄せを把握するなど、像を効率的に制作するための縮小模型として使用されたと考えられている。また、注文主に提示する完成予想図としての役割や、工房における造像の記録としての役割を担ったこともあっただろう。

近年某所より発見された 420 件の雛型（龍谷大学龍谷ミュージアム保管）はすべて、畑治良右衛門という江戸時代初期から平成まで十五代続いた仏師の家系で守り伝えられてきたものである。畑治良右衛門は江戸時代の造仏界の名門・七条仏師とも縁が深く、雛型群には七条仏師に関連するものも多く含まれている。これほどまとまった量の雛型が発見されることは稀で、いずれも 20 センチにも満たない大きさでありながら、大変精巧に造られている。雛型については、これまで体系的に論じられる機会がなかったが、この度雛型群に記された銘文を精査するとともに、実作品が確認できた像について調査・撮影を実施し、雛型との比較検討を試みた。

あらたに調査・撮影をおこなった 4 軀（後光厳・後円融天皇坐像〈京都・泉涌寺〉、上林竹庵坐像〈同・上林春松記念館〉、桃溪甫仙坐像〈兵庫・弥勒寺〉）について、いずれも雛型と実作品とは各部の比率が異なるため、造像前の縮小模型としての役割を果たしたとはみなし難いと考えに至った。雛型は姿形を把握するため（あるいは注文主や施主に供覧するため）の見本や手控えとしてつくられることが多かったのではないかと考えられる。雛型は造像の裏方的な存在であるが故に文字資料に登場することも稀だが、実作品を制作した工房にとっては財産というべきものである。雛型群の用途の解明や位置づけについては、引き続き各作品の精査を積み重ねていく必要がある。